

同世代の物語 始まる

神栖市のはさき漁業協同組合で四月から、技能実習生として漁業を学んでいるインドネシアの十九〜二十一歳の若者十七人が、地元の県立波崎高校の生徒と文化交流した。実習生は日本の書道や華道を初めて体験し、返礼に母国の伝統舞踊や武道を披露。六月から漁船での本格的な実習が始まるのを前に、同世代の日本人と相互理解を深める機会になった。

(竹島勇)

絆を繋いでいく

交流会は二十四日、同校で開催された。白い胸着に黒はかま、赤いたすき掛けが印象的な男子一人を含む六人の書道部員が登場すると、実習生たちの目がくぎ付けになった。

「今から書道パフォーマンスをします。音楽に合わせて手拍子してください」と、部長で二年生の篠木莉央さん(二)が呼びかける。縦約一尺、横約四尺の巨大な紙の上に、部員たちがそれぞれ太さの違う筆を走らせるのを、実習生たちは手をたたきながら見つめた。

書き終えた紙を持ち上げると「歩いてきた道はそれぞれ違いますが、繋いでいく／私たちの絆／巡る季節の中で／物語はここから始まる／波高書道部」のメッセージ。繋は朱色、「絆」は青色の太く力強い筆致だ。通訳から説明を受けた実習生から大きな拍手が起きた。

愛は大切だから

続いて、実習生たちは書道と華道に挑戦。書道部員と華道部員が各実習生の隣に座り、助言に当たった。

書道では、半紙で練習してから色紙で完成させる。「夢」「愛」「幸」などの楷書の手本が置かれていたが、何を書くかは自由だ。筆を持つのは初めてとあって最初はおぼつかなかったが、「そこはこうはねて」「バランスよく」などのアドバイスを聞き、集中して取り組んだ。

「愛」の字を選んだ実習生は「誰にとっても愛は大切だから」とはにかんだ様子で説明した。華道では、キクとギガンチウムの花の茎を切って剣山に挿していく。「長さを考えて切つて」「中心になる花は自分に向くように」と指導を受け、慣れない手つきながら自分なりの生け花を仕上げた。

関心持ち続ける

最後に、実習生たちはインドネシアの文化を紹介した。一人が、ジャワ島に伝わる王にささげる舞踊を披露。鳥に見立てた帽子をかぶり、上半身をさかんにひねる所作に、高校生から歓声が上がった。別の実習生たちは空手に似た武道を実演してみせた。

実習生代表のアディティア・

ジャワ島の民族舞踊を披露する



ワセさん(三)は「書道も華道も難しかったけれど楽しかった。本格的な実習の前に良い体験ができました」と、笑顔で感謝の言葉を述べた。

生徒を代表して、篠本さんが激励のあいさつ。今日は楽しんでいただけましたかと聞くと、実習生たちは「はい」と声をそろえた。篠本さんは取材に「書道を外国の方に知ってもらえて良かった。自分の近くに外国から仕事を学びに来ている方がいることを実感できた。これをきっかけにインドネシアへの関心も持ち続けたい」と話した。



- ①華道部員の指導で生け花に挑戦する
- ②書道部員から筆の使い方を教わる
- ③書道パフォーマンスで完成した作品に拍手を贈る技能実習生たち＝いずれも神栖市で